重い障害をもった子どもたちへの
シェアリングネイチャープログラム

2013 年 3 月 15 日

日本ネイチャーゲーム協会　藤田航平（東京都）

1. はじめに

2012 年 5 月 1 日、日本協会に、重い障害をもった子どもたちへのネイチャーゲーム指導の依頼をいただきました。依頼主は、新宿区立新宿養護学校を拠点に、肢体不自由児への放課後活動「ひまわり HAUS」をはじめ、重症心身障害児の自立支援に取り組む「NPO 法人ひまわり PROJECT TEAM」さんです。

※重症心身障害児とは
重度の知的障害及び重度の身体障害(肢体不自由）を併せもつ（重複障害）子どもたちの事です。障害が重く、ほとんど全面的な生活介護が必要なだけでなく、てんかんなどの他、呼吸機能、嚥下機能、消化器、姿勢など医療的管理が絶えず必要とされます。（NPO 法人 ひまわり Project Team ホームページより）

「重症心身障害」「肢体不自由」という言葉を聞くこと自体がはじめてで、当初お話をうかがったときには、何ができるだろうかという躊躇がありましたが、一方であまり外に出られない子どもたちにも自然とのふれあいを楽しんでもらいたいと可能性を感じ、3 人の仲間（グリーン相模原ネイチャーゲームの会の高崎宏美さん・渡邉敦子さん、看護経験のある藤田佳子さん）と相談しながら準備を始めました。

2. 受け身に見える「能動的な体験」

「いかに子どもたちに能動的な体験をさせられるか」が課題と感じ、まず対象者理解のために事前に活動の様子を見学させていただきました。子どもたちの「できることと、できないこと」は、今まで指導経験で得ている感覚と大きく違っていまいた。子どもたちは「話せない」ことがほぼ前提でしたし、座ったまま、寝たまま活動に参加する子どももいます。また焦点を定めるのが難しいことや、手を細かく動かすことが難しい子どももいることなど、一人一人さまざまに状況が違うことも知ることができました。

当日は、動物園の方から動物の毛皮（剥製）を触らせてもらうプログラムを体験していたのですが、一つ一つの毛皮に喜んだり、怖がったりと実に豊かな表情を見せてくれました。そして、その様子を共に喜び、楽しむ保護者の方や、付き添いの方の姿がありました。

ただ、この様子に「あまりに“受け身”すぎはしないか」というひっかかりが出てきてしまい、同時に、これ以上のことを実施することの難しさも感じました。この悩みに対して代表の方に言っていただけたのが「重症心身障害をもち手足が不自由な子どもにとって、

触ること自体がとても能動的なことです」という言葉です。言葉を介しての意思表示やわかちあいが難しいとき、子どもたちが受け身の状態に見えるかもしれませんが、子どもたちが興味をもつということ、そして見ようとすること、触ろうとすること、耳を傾けること、においをかぐこと、これらが「自分自身の感覚を使う」という意味で、とても能動的な状態と言えるのだと気づかせていただきました。

3. プログラム立案にあたって

プログラム作成時に注意事項
・集中が持たず、飽きやすい場合がある
・触れることはできても、にぎる、なでることが難しい子どももいる
・音を聞く活動はとても好きで喜ばれる

プログラム作成にあたって考えたことは、子どもたちが普段できない、新鮮な体験をさせてあげたいということです。

重症心身障害をもつ子どもたちは免疫機能が低く、体調を崩しやすいため、安全面への課題は非常に大きく、野外での活動は制限されがちです。野外では車が乗り付けられる場所でなくてはならず、医療関係者の付き添いも必要なため、身近な公園へ行くのもとても大変なこととお聞きしました。

そこで、身近な公園にある落ち葉や、木の実を集め、水洗いや日干し、消毒用アルコールなどで洗浄、消毒をして持ち込みました。また夏の会には近所の公園で昆虫を集め、あらかじめ虫かごに入れて子どもたちが直接触れないよう配慮しました。

また、子どもたちは放課後に会場となる新宿養護学校内のプレイルームに集まり、活動の前に健康チェックやマッサージなどの時間をとり、心と身体の準備をしてから活動を開始することから、この時間から子どもたちの側にいることで、プログラムに先立ってお互いに慣れるための時間を意識しました。

●第1回　2012年7月18日（水）
「身近な自然と遊ぼう！」（参加者5組）

時間	活動
15:00	あいさつとスタッフ自己紹介
15:05	①葉っぱで遊ぼう！ 葉っぱの感触や、香りを楽しむ
15:20	②木の実で遊ぼう！ 木の実の感触や形を楽しむ
15:35	③身近な生きもの観察 集めた虫の紹介と身近な生きものの鳴き声紹介（ECペン）
15:50	集合写真など
16:00	終了

●第2回　2012年11月28日（水）
「秋の実りを楽しもう」（参加者4組）

時間	活動
15:00	あいさつとスタッフ自己紹介
15:05	①落ち葉とドングリで遊ぼう！ 落ち葉の感触、香りを楽しむ ドングリの手触りを楽しむ
15:15	②秋の実りを楽しもう！ 木の実の感触や形、音を楽しむ
15:25	③ドングリマラカスで合奏
15:40	クリスマスプレゼント
15:50	集合写真など
16:00	終了

4. 子どもたちの様子

子どもたちは焦点を合わせることが難しいと聞いていたので、見るだけでなく聴覚や嗅覚を積極的に使ってもらえるよう進めました。しかし物を掴む、なでるといった細かい動作が難しい子どももいて、付添いの方に自然物を見やすい位置や、鼻の近くに動かしてもらったり、また手触りを感じてほしいものを握らせたり、手の甲や指先にふれさせるなどしていただきました。多様な感覚をつかった活動は、子どもたちの五感を刺激し、集中力の維持を助けたようでした。

2 回のプログラムでは毎回、自然物を詰めた箱を子どもたちに一つずつ用意しました。夏にはクスノキ、サクラ、カツラ、ユリノキ、マツ、カエデ、マテバシイなどの葉っぱ、ドングリ、マツボックリなどの木の実を入れ、形の違い、手触り、香りを楽しんでもらい、またユリノキやカエデの種がくるくると回りながら落ちる様子を見てもらいました。11 月はマツボックリ類、サイカチ、ホオズキ、ムクロジ、トチなどの、それぞれに個性的な木の実類を見たり、触ったり、また音を鳴らしてみたりして楽しみました。

子どもたちは次から次へと紹介される自然物を、身体をいっぱい使って感じていきます。また合間合間に自然物についての小ネタを挟み、子どもたちには少し難しい話のときには、付き添いの方から優しく楽しく伝えていただきました。また大人の「へぇ〜」といった驚きの声を聴いた子どもたちが一緒に楽しそうにしている様子も印象的でした。

さらに夏の会ではカナブン・モンシロチョウ・ダンゴムシ・カタツムリ・センチコガネなどが入

保護者や付きその方、看護士の方などたくさんの大人が子どもたちを見守り、一緒に参加してくれました

大きさ、色、形、手触りなどの違いを楽しんでもらえるように、さまざまな落ち葉を集めました（第 1 回）

小さな容器に細かくした落ち葉を入れておき、香りを楽しみました。クスノキの香りに大喜び

昆虫カップの中にいるカタツムリをじっと見つめています。子どもも、大人も真剣なまなざしです

れた虫かご、観察カップ、虫ポーチを回してもらったところ、子どもたちにとっても付き添いの方にとっても新鮮だったようです。冬の会ではクリスマス間近ということで、グリーン相模原の会のお二人に作ってきていただいたサンタのクラフトと、クリスマスリースをプレゼントしていただき、自然物を持って帰ってもらえるようにしました。

5. 季節を運ぶ自然案内人

「テレビや映画などを通して、子どもたちはドングリのことを知っているのですが、健常の子どもたちのようにドングリを拾う体験はなかったので、今回本物を実際に感じることができ、映像の中のことと実際とがつながったような気がします」と保護者の方に言っていただけました。

また季節ごとに持ち込める自然物が限られるため、夏には生き物、秋には木の実がメインとなったのですが、この部屋の中に季節を運んで来ていただけたと喜んでいただけました。子どもたちは体温調整が難しく夏の暑さにも、冬の寒さにも外に出ることを制限されてしまいます。そのため季節の話題を聞いても、それを直接感じられる機会が少ないとのことです。

おどろきのクリスマスプレゼントに歓声が上がりました。自然の恵みがたくさんつまったリースと、サンタのクラフトです。

季節を意識したプログラムの展開は、普段の健常の方向けのイベントにおいても、重要なポイントですが、室内で展開するプログラムでも同様であり、「季節を運ぶ」という私たちの関わり方で、これまで通りの「自然が先生」という言葉を実践できたのだと嬉しく思いました。

6. シェアリングネイチャープログラムとしての展開

ベーシックなネイチャーゲームアクティビティの手順では、「表現すること」が必要な場合がほとんどですが、「それが難しい」というのが今回の条件でした。オーソドックスなわかちあいはもちろんできません。しかし、指導員の心がまえである「わかちあい」の姿勢で、自然と子どもたちをつなぐ役割は果たせると感じました。また「フローラーニングがうまく行くかどうかは、いかに参加者の反応を敏感に感じ取ることができるかにかかっています」(『シェアリングネイチャー　子どもと自然をわかちあおう』P55) ということも同じでした。

子どもたち自身は表現することが難しかったりしますが、「好き」や「嬉しい」という反

応は私たちにもわかりましたし、付き添いの方たちが子どもたちのちょっとした感情の動きを感じ取り、その心情を代弁してくれます。また付き添いの方たちが嬉しそうな声をあげると、子どもたちも嬉しそうな顔をしています。そこには常に「わかちあう」気持ちがあり、今回の活動を通して「信頼関係」と「わかちあい」との間にある強い関係性を改めて感じることができました。

7. おわりに

「繰り返し学習をさせてあげたい」これも保護者の方の声です。

「ひまわり HAUS」では見る、聞く、触る、嗅ぐといった感覚を通して得られる知覚や認識と、その対象とをつなげて理解することを活動目的の一つにしているそうです（感覚統合）。「身近に触れることの少ない自然界の物に対しては見ただけ、触っただけ、聞いただけでも喜べるのですが、見て、触って、聞いて、嗅いで、それが何かを理解できるようになることを目的にすることで、継続していく価値はより高くなると思っています」という代表の藤原千里さんの言葉をお聞きし、私たちネイチャーゲームリーダーの果たせる役割があると改めて感じました。

こうした障害を持つ子どもたち、そしてその子どもたちを支援する大人たちは全国におられることと思います。今回のようなプログラムは普段以上に準備が大変かもしれませんが、幸い私たちにはたくさんの仲間がいますので、協力し合えばさほどでもありません。全国の仲間たちが本事例を参考にしていただき、障害をもった子どもたちと自然とを近づける「季節を運ぶ自然案内人」として名乗りを上げていただければ幸いです。

ひまわり PROJECT TEAM さんのホームページでも、活動の様子が紹介されています。ぜひ、ご覧ください。

参考

http://himawarihaus.web.fc2.com/